

今日の福音書は、イエス様が、弟子の筆頭格であるシモン・ペトロに、「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」と言われた、有名な所です。

先週の福音書では、「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。」と褒められたのに、その直後に叱られて、全く、天国から地獄のような評価になっているのです。先週の福音書で、彼はイエス様のことを、「あなたはメシア、生ける神の子です。」と、的確な答えをしたのですが、そのメシアが、苦しんで殺される、という予告をされると、「そんなことがあってはならない。」と、まるで、ペトロが力づくでも、イエス様が殺されるのを防ごう、というような態度です。

メシアというのは、「油注がれた者」という意味です。これは、王様や、預言者など、リーダーが任命される時、油を注ぐ習慣があったために使われるようになった、指導者に対する称号です。しかしメシアと言ってもいろんな種類のメシアがいます。弟子のペトロは、「あなたはメシア」と言いましたが、ペトロが頭に描いていたメシアとイエス様が考えておられたメシアでは、全くその内実が違うのです。

「神のことを思わず、人間のことを思っている。」というイエス様の言葉で、みなさん、どんなことを想像されますか？

メシアを遣わされるのは神様なのですが、それを受ける人間の思惑が違っていた、ということでしょう。親が子どものことを思ってプレゼントを用意したが、子どもの期待しているものではなかった、このミスマッチが起こっているようなものでしょう。

想像できると思いますが、シモン・ペトロが考えているメシアは、どんな存在だったのでしょうか。

イエス様の時代は、今から約2000年前ですが、それよりも更に1000年前。イスラエルの国を統一した、ダビデ王をメシア（油注がれた者）として、頭に描いていたのだろーと思われま。預言者のサムエルが、ベツレヘムで羊飼いをしていた少年のダビデに油を注いだ話は有名です。

ダビデが登場するまで、イスラエルは、最初の王であるサウルの時代を含めて、国はまだ統一されておらず、まわりのカナン人、ペリシテ人などに脅かされ、さらに、西にはエジプト、東には、メソポタミアの大きな国が圧力をかけてきました。

ダビデ王が出てきて、やっとエジプトやメソポタミアに対抗できる、強い国ができあがったのでした。

それから1000年過ぎて、イエス様の時代のイスラエルも、ローマ帝国に支配されて、半分植民地の状態でした。そんな政治状況から、自分たちの国を独立させてくれる、ダビデ王のような存在を、メシアとして期待しているのが、ペトロの描いていたメシア（油注がれた者）だったと思われま。力強い政治的な英雄を期待していたのでしょー。

だから、ペトロの考えるメシアとは、この世の権力者ですから、相手を傷つけても、自分は傷つかない。いや傷ついてはいけない、相手を力でねじ伏せる、常に勝たなければならないリーダーでした。

10年前の2013年10月13日に亡くなった、マンガ家のやなせたかしさんは、戦争に従軍しての経験から、正義というのは、人を力づくで従わせる存在ではなく、貧しい人に食べ物を与えるのが何よりの正義だ、ということで、人々にパンを与える正義のヒーロー、アンパンマンを思いついたのです。

アンパンマンは、スーパーマンやウルトラマンと違って、自ら傷ついてゆくヒーローだと説明していました。これが、イエス様の言われるメシアに近いのではないのでしょうか。

神様から遣わされたメシアというのは、神様を指し示すような存在でしょう。

この神様というのは、人間をご自分の命令どおり、ロボットのようにコントロールするのではなく、出来が悪く、失敗ばかりする人間をかばって、代わりに傷つき、犠牲を払うほどの愛を持っている方、ということではないか、と思います。

アメリカ合衆国長老教会のカテキズム（教会問答）の最初の方、問4に「神さまに愛されるためには『良い子』にならないといけないですか。」というのがあります。その答えは「いいえ。わたしがどんな子であっても、神さまは愛してくださっています。」と書かれています。イエス様ご自身がメシアと言って頭に描いておられるのは、こんな必死に人間を捜し求め、救い出そうと、傷つきながら歩き回っている神様のようなメシアのイメージでした。自分が損をすることなんか、まったく意に介さない。それが、イエス様の言われる「神のことを思う」、神様の遣わされたメシアの役割でした。

ここで考えなければならないことは、わたしたちがイエス様の言われるメシアを受け入れる用意ができているか、ということです。

ペトロはイエス様のことを「あなたはメシア、生ける神の子です。」と、正しい答えをしたのだから、あとはイエス様の言われるメシア像を素直に受け止めたらよかったのではないか、と思うのです。

ペトロが、イエス様に「あなたは救い主だ」と言ったのに対して、イエス様は「だからわたしはあなたのためにも十字架につく。」と言われたことに、わたしたちは応じて、「主よ、ありがとうございます。」と言うのが本当の信仰でしょう。

ところが、わたしたちもペトロのように「主よ、とんでもないことです。」と言ってしまっているのではないのでしょうか。「イエス様は十字架にかからなくてもいい。そのままわたしたちの立派な先生でいてください。わたしたちも先生の真似をして立派に生きていきます。」

このような考えの根底には、わたしたちは自分では救うことができない、罪びとであって、イエス様の十字架によってしか、私たちに救いはない、という気持ちにまで行き着いていない、そこにペトロとわたしたちの問題があるのではないのでしょうか。

自分自身の罪深さ、自分の力ではとても立ち上がれない。イエス様の助けがなければ、生きて行けない、という自分のことを支えてくださるメシアに頼ることが信仰の根本なのです。

ひとりで十字架を背負おうと決断されたイエス様の前にひれ伏し、それによって救われて、わたしたちも自分の十字架を背負ってゆこう、という気持ちにまで成長することを、今日のイエス様は私たちに願っておられる、ということに気づきたいと思います。

共に重荷を担う、傷つきながらも、お互いを助け合う共同体に成長することが大切だと思います。